



EARTH TREE おかげさまで20年

# 地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

## CONTENTS

- ごあいさつ ……1
- 国境を越えた市民が共に生きるために ……2~7
- 地球の木20年の歩み ……8~10
- 地球の木支援プログラムの変遷 ……11
- ひとこと ……12

## 地球の木 設立20周年特集号



### 新たな希望を抱いて

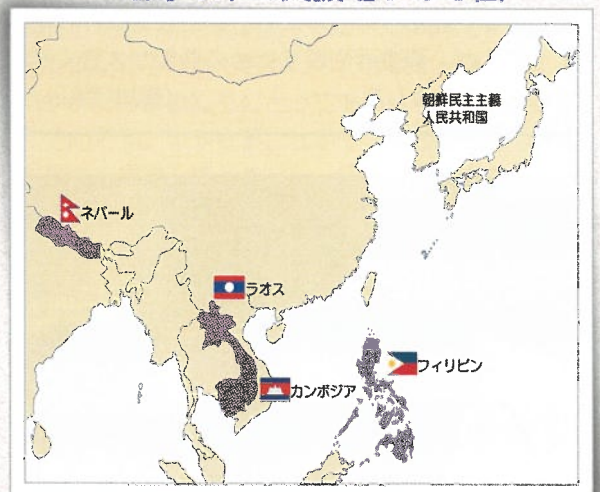
理事長 丸谷 士都子

地球の木は、設立20年を迎えました。振り返ると地球の木の仲間が様々な地域でたくさんの人々と出会ってきたことがわかります。内戦の跡も生々しいカンボジア、飢餓から立ち上がるフィリピンネグロス島、自給自足の生活が残るラオスの村、民主化に向かうネパール。その中で私たちにできることを考え今の活動につなげてきました。

多彩な活動を展開することができたのは、支えてくださった大勢の会員やボランティア、関連団体のみなさまのおかげです。ありがとうございました。

地球の木の使命は、継続的な活動をして世界と日本のつながりを伝えていくこと。厳しい社会情勢の中、地域の絆の大切さを再認識した新たな希望が芽生えています。これからも応援をよろしくお願いします。

### 地球の木の支援地がある国



■発行日 2012年5月26日 ■発行者 特定非営利活動法人 地球の木 ■編集/制作 地球の木20周年実行委員会記念誌部会  
 ■横浜市中区不老町1-3-3フェニックス関内2F TEL 045-228-1575 FAX 045-228-1578 E-Mail chikyunoki@e-tree.jp http://e-tree.jp/



# 国境を越えた市民が共に生きるために

## 地球の木20年

### 地球の木



この創刊号で始まった会報の発行は、以後20年、年に4回欠かすことなく続いており、地球の木と会員を結ぶ大切な役目を担っています。その時々々の活動記事に、多くの人たちの力そして想いを感じます。  
(沼田 由美子)

### あのことろ…

#### 学び意欲旺盛の時代

初期の頃は生活クラブの専門委員会のように、会員の「拡大」が大きな議題でした。NGO活動などよくわからず混乱していましたが、学びたい意欲は旺盛で、北沢洋子、西川潤、村井吉敬などの講座を開き、本を読みました。「南北問題」「IMF」「世銀」「ODA」などの言葉を使いながらも、頭でっかちの感がありました。現地訪問でようやく言葉と現実が重なっていったと思います。

また当時は会費が手渡したかったので、顔を見せると「アッごめん、まだ会費払ってない」と言われ、気まずい思いもしました。第三世界の人々を身近に感じてほしいと、年に1回フェアトレード品のプレゼントがあり楽しみにしていた人も多かったのですが、資金面や渡すための負担が大きくて、行わなくなりました。  
(横川 芳江)



プノンペン郊外の病院で聞き取りするカンボジア市民調査団のメンバー

### 「地球の木」設立への道

1980年代後半から90年代は、世界が大きく変動する時代でした。東欧諸国の政変、ベルリンの壁崩壊による東西ドイツの統合、ソビエト連邦崩壊など社会主義体制の崩壊により鉄のカーテンで遮られていた東西対立が解け、平和な時代の到来と期待されました。しかし湾岸戦争が勃発し、アメリカが武力や経済力によって新しい秩序を確立させる方向を示しました。経済格差が広がり、貧困や飢え、環境破壊など、南北問題は一層厳しい状況に置かれていました。

1984年にアフリカでおこった飢餓に対して、生活クラブ生い神奈川の組合員や職員が「一食カンパ運動」（ランチ一食500円の募金）を始め、単なる支援にとどまらず、「飢え」と「飽食」が同居している世界を知り、自らの生き方を問い直す運動として展開しました。しかし継続的な活動には至りませんでした。

1991年、恒常的に資金を確保しながら、国境を越えた市民が協同するための組織として、グローバル市民基金「地球の木」を立ち上げました。事務所を新横浜にある生活クラブのオルタナティブ生活館内に置きました。

### グローバル市民基金「地球の木」誕生

設立総会には「国際交流」を提唱していた長州県知事がお祝いに駆けつけるなど、県内での新しい活動として期待されました。当初は生活クラブ組合員に働きかけて「市民基金」を作り、その財源を運用して支援を行う計画でした。

県内には国際協力団体は少なく、NGO活動は未知な活動だったので、「日本国際ボランティアセンター（JVC）神奈川」からアドバイスを受けました。その関係で最初の海外調査としてJVCラオスのプロジェクト地を訪問しました。この時以来JVCラオスへの支援は継続しています。また、生活クラブや労働組合などが行った国際シンポジウムがきっかけとなって組織された「草の根援助運動」とのつながりから、フィリピン・マニラのスラムと農村のマイクロビジネスへの支援を始めました。

「地域と地域をつなぐ住民同士の連帯」を進めるために、生活クラブの支部活動に準じて「ランチ（地域の活動単位）」が作られました。これは他のNGOと大きく異なり、足元からの国際協力を行う地盤となり、地球の木の特徴となりました。

### 平和への取り組みから運動の自立へ

1992年、カンボジアにおける国連のPKO（平和維持活動）に自衛隊が派遣されました。自衛隊の海外派遣は戦後日本の大きな

転換点となりましたが、このような状況下、地球の木会員の提案により、生活クラブは「カンボジア市民調査団」を結成しました。1992年10月派遣の第1次調査団メンバーは全員が地球の木会員でした。

その後、日本のODA（政府開発援助）で農薬が送られることがわかり、反対の署名を集めて外務省に届けるなど、運動は世間の関心を集めました。この時に日本の多くのNGOによって結成された「カンボジア市民フォーラム」に地球の木は立ち上げから参加し、現在も活動が続いています。

他のNGOとの連携が深まるにつれ、運営に関わるメンバーもNGOとしての経験を積み、国際協力団体として成長していきました。海外プロジェクト地への調査やスタディツアーなどが行われ、様々な場での発言の機会も増えました。

### 地球の木ならではのスタディツアー

現地駐在員を置かない地球の木にとってプロジェクトの運営には定期的に支援先を訪問し、進行状況を調査する必要があります。多くの人たちに現地を訪問してもらい、理解者を増やしたいとスタディツアーが計画されました。初めは参加者が村の人々へ質問攻めをして、現地の方から「質問ばかりして一体何をしてくれるのだ」と怒りをぶつけられたこともあり。そうした反省を踏まえ、人々との交流や建設的な意見交換の場としてのスタディツアーが計画されるようになりました。

特に1995年から始まった若者を対象にした「青少年スタディツアー」はフィリピン、さらにネパールで実施され、地球の木ならではのツアーとなり、大きな成果を上げました。フィリピン・ネグロスではバナナ生産地域の若者と日本の青年たちが、時には都市スラムの青年たちも交え、お互いの暮らしについて寸劇で表現しました。図らずして日本の自分たちの暮らしを見つめ直す機会となりました。この時の参加者は現在も交流を続けています。

またラオス、カンボジアのプロジェクト地へのスタディツアーも行われました。

### 設立5年を経て顔の見える支援始まる

1996年、地球の木は設立して5年がたちました。1997年1月には、設立5周年事業として劇団風の子による「ぼくたちの南十字星」を上演、アジアと私たちとの関わりを真剣に考える素晴らしい機会となりました。

またこの頃には、なんぶランチではネパールNGOのニルマラK.C.さんとの交流をきっかけに少数民族の識字教室への支援が始まり、さらにほくぶランチは、カンボジアに孤児のためのチャイルドケアセンターを建設し、直接支援と交流が始まりました。

日本のNGOを通しての支援ではなく、現地の住民組織やNGOとの関係を密にし、人々と意見交換しながらプロジェクトを進める「地球の木」独自の支援を期待する声が高まってきました。



フィリピン青少年スタディツアーでは一緒に寸劇を



ネパールユース交流スタディツアー 学校見学やワークショップに参加

### あのことろ…

#### 若者たちの真剣な眼差しが美しく…

「青少年フィリピン・スタディツアー」の初回は1995年3月、参加は2人の学生でした。山間部のバナナ村を訪問、民泊し、翌日は村の若者らと都市部に戻り、他の地域を訪ねるという日程でした。民泊ですっかり仲良くなった日本とネグロスの若者たち。国の違いを忘れた夜でした。

翌日は都市スラム地区を訪問。そこはゴミ捨て場の上で生活している地区でした。それまで笑顔で冗談を言い合っていた若者たちの表情が一変しました。バナナ村の若者たちにとっても信じられない光景だったのです。水や食事、仕事や学校のことを心配して次々に質問していました。日本の若者も真剣な表情で聞き入っていました。その時の若者たちの真剣な眼差しが一面に広がる夕焼けの中でとても美しく思えました。  
(日野 由紀子)



身寄りのない子どもたちが、バタンバンの子供センターで暮らしながら学校に通いました。





「ネパール・わくわくワークショップ」(上)と「マジカルバナナ」(下)



### 「マジカルバナナ」の出版と地球市民教育

支援地の話をするとき、伝える道具があると理解が深まります。フィリピン・ネグロス島の現地の状況を報告する際には、バナナや大きな写真などを使っていました。バナナは現代の不正な経済優先の社会の仕組みを考える材料でした。

1997年、開発教育協議会(現・開発教育協会)の教材開発セミナーがきっかけとなり、参加者と共により伝えやすい新しい教材を作れないか、模索が始まりました。ワークショップを行いながら試作を重ね、2年をかけて『マジカルバナナ』を完成させ、1999年3月、「地球市民教育教材」として販売を開始しました。教材とは教育関係者が制作するもの、という常識を覆し、NGOが制作販売したことは画期的な出来事でした。

その後、ネパールで行っていた識字教室を題材にした『タル族の家族ゲーム』、森や自然と共にある暮らしについて知り、開発による影響や自分たちの暮らしを振り返る『ラオスの森・村の暮らし』、フィリピン・ネグロス島のサトウキビ農園の労働者たちが飢餓・貧困から自立していく過程をすくろくにした『マジカルシュガー』などの教材を作りました。このようなさまざまな教材を使用した学習会や出前講座などに力を入れ、教育の現場に出向き、地球市民教育としての活動を推進しています。

出前講座は神奈川県内の多くの学校で実施されてきました。地球市民教育は、支援地の課題を現代の社会構造としてとらえる重要な活動となっています。

### 「南北コリアと日本のともだち展」

1997年、国際連合世界食糧計画(WFP)は朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)の洪水被害への国際的支援を呼びかけました。地球の木では支援に抵抗感のある人も多く、理事会を二分する議論が続きましたが、「国交が無く、国の体制が違っていても困難な状況にある人々への支援はNGOだからできる」などの意見から、「KOREA水害・支援キャンペーン」に参加することになりました。

現地調査や学校訪問などを重ねて交流が進んだことから、子どもたちの描いた絵を持ち帰ることができるようになり、国内の支援ネットワーク団体とともに子どもたちの絵画展を開催することができました。その後、韓国NGOとの連携が進んで「南北コリアと日本のともだち展」へと発展、昨年、10周年を迎えました。

一方、神奈川県では外国籍県民との共生が掲げられ、1997年には知事への提言を行う「外国籍県民かながわ会議」と「NGOかながわ国際協力会議」が設置され、委員として参画しました。この活動を通して在日コリアンや他の外国籍県民との連携が深まりました。

「21世紀を平和な社会にしよう」と始まった「あーすフェスタかながわ」もこうした動きを発展させたものでした。地球の木も構成団体となり、NGOと自治体が仲立ちすることで、南北朝鮮の団体が同じテーブルに着くという画期的な状況が作られました。



「ともだち展」はソウル、ピョンヤンでも実施。絵を通した子どもたちの交流が互いの理解を深めました

### グローバル市民基金から特定非営利活動法人へ

1998年、「特定非営利活動促進法」が制定され、NGOや市民運動グループも法人格を持てるようになりました。

地球の木はこれまでのグローバル市民基金構想を転換、1999年11月、特定非営利活動法人として新たな出発をすることになりました。設立総会では「手をつなぐアジアの女たち」と題するシンポジウムを開催、タイの女性活動家シニット・シティラックさんを招聘しました。シニットさんとは1995年北京で開かれた「世界女性会議」で出会い、1999年には著作『母のキッチンガーデンから』を地球の木が翻訳・出版するなどの交流を重ねていました。

2002年9月、関内駅前という素晴らしい立地条件の場所に事務所を移転しました。事務所費用などの経費が増えましたが、バザーやイベントなどに積極的に参加したり、地球の木カレンダーを販売するなどして費用を捻出、困難をばねとしてさらに活動が広がりました。

### 成果を上げて終了した支援

設立後10年近くが経過し、海外プロジェクトの継続について話し合いました。それぞれのプロジェクトの自立を目指し、3年ごとにプログラムを見直して継続を検討し、最長9年までには終了するという目安を設定しました。

JVCカンボジアの支援は井戸掘りや米銀行から始まり、夫を亡くした女性たちのための牛銀行や小口融資も行いました。女性たちが自力で運営管理ができるようになってところまで支援を継続しました。

フィリピン・ネグロス島では日本ネグロスキャンペーン委員会を通して、サトウキビ農園の労働者だった人たちが農業で自立するための支援を行いました。その後、地球の木は「レッツ・ゴー・ファミリー」と名付け、家族農家の自立を応援しました。女性も含め、家族で協力しながら農業に携わることや、他地域の成功例を見ることで力をつけました。支援した農家は有機農業に力を入れ、販売ルートも開拓するようになりました。

なんぶランチが始めたネパール極西部の識字教育支援は、地球の木全体の取り組みへと発展しました。支援地はNGOがまだあまり入っていない地域でした。少数民族の女性たちが識字を通して自分たちの潜在能力に気づく過程に、会員の関心が集まりました。ちょうどネパールが民主化に向かう時期だったこともあり、国民の権利や憲法についての学習会も行いました。のべ2,000人以上が参加した識字教室は、貯蓄グループや協同組合に発展し、支援が終了した現在も活発な活動が続いています。

また、ほくぶランチが始めたカンボジアのチャイルドケアセンター支援も、地球の木全体の支援となりました。エイズで親をなくした子どもたちが、そこで生活をしながら教育を受けました。プロジェクト終了後も里親を募集して、3人の里子が成人するまで支援しました。

地球の木会員が翻訳した著書を手にするシニットさん(右から2人目)を囲んで



### あのこと...

#### 一粒の種が.....

1994年7月、若手リーダー研修で来日中のニルマさんのホームステイを引き受けたことが、すべての始まりだった。彼女のパワーに圧倒され、なんぶランチで支援を念頭に置いた活動が始まった。あの頃はEメールもなく、現地との連絡に悪戦苦闘した。業を煮やして1996年、ネパールに行くことにした。初めて訪れた極西部は、まるで「インディー・ジョーンズ秘境の旅」。橋のない川をおんぼろジープで渡り、ジャングルを走っていると、麻で編んだベッドに老人を乗せた人力救急車と行き交ったり、祈禱師の家に案内されたり、見る物すべてが珍しかった。

識字教室10クラスから始まった支援。しかし、女性に焦点を当てたことは間違っていなかった。母親たちは教育の重要性に気づき、小学校は子どもたちで溢れた。一粒の種が協同組合作りにまで発展するなど想像だにできなかった。(乳井 京子)

ネパールの識字教室の先生になったテラニさんに感謝状を贈呈



大規模に有機野菜を栽培しているフィリピン支援地のファミリー



## ラオス、カンボジア、ネパールで新しいプロジェクト

JVCラオスは、ラオス中部にあるカムアン県で森林保全と持続的農業を柱とした農村開発活動を展開してきました。2009年からは企業進出による開発が進むサワナケート県に現場を移して活動を継続しており、地球の木も引き続きこのプログラムを支援しています。

ラオスでの経験から、森の大切さを伝える絵本を作ろうというアイデアが生まれました。「ともだち展」で出会った絵本作家の田島征三さんに制作を依頼し、ラオスの人たちの生活取材するために、田島さんと一緒にラオスを訪れました。

カンボジアのタケオにある、少女たちの生活の自立を助けるための職業訓練センターへの支援は、2007年から始まりました。織り、染め物、洋裁の専門家を派遣し、技術を向上させ、商品となるシルク製品づくりをサポートしました。この活動を通して、カンボジアの厳しい状況を知るとともに、継続した関係が少女たちをエンパワーすることを学びました。現在、シルク製品の注文生産は、フェアトレード事業「幸せ分かちあいクラフト」へと発展しました。

また、ネパールでも、2007年に「幸せ分かち合いムーブメント」がスタート。参加型開発の専門家カマル・フヤルさんと、少数民族が多く住む地域にある高校の図書室設置や奨学金制度の支援を始めました。

村人自身が行った参加型農村調査法を用いた700世帯の全村の基礎調査の結果をもって、現在、教育プログラム・収入創出プログラムなどを実施しています。村から発信するニュースレター『ロシ・ラハール』や各地域で行われるワークショップの効果もあり、村人たちが実にいきいきと主体的に活動に参加しています。

## プロジェクトからプログラムへ

カマルさんと活動する過程で、支援のあり方について多くを学びました。「村の人たちにとって、村をよくしていくことは期間を区切ってやるものではなく、永遠に続くもの。だからムーブメント（運動）と名付けましょう」というカマルさんのことばには、「プロジェクト」と銘打って自分たちの都合で資金を使おうとする海外ドナーの支援のあり方への批判がこめられています。

2009年度より、海外プロジェクト間の情報交換の場として、「プロジェクト連絡会」が発足。連絡会主催で「『援助』する前に考えよう」のワークショップを開催しました。その後、プロジェクトの評価に、国際協力における「外部者」としての役割という観点を加えました。

2010年度には地球の木の支援のあり方をより明確にしました。現地の人たちが主体となり、必要な社会開発を現地のやり方を尊重して行う「参加型開発」を大切にしていこうと明言しました。そして、支援側が内容や到達点を決定する意味合いを含む「プロジェクト」という名称を「プログラム」に変更しました。



ラオスの子どもたちに自作の絵本を見せる田島征三さん



カンボジアの職業訓練センターで織りをする少女



「幸せ分かちあいクラフト」へと発展したシルク製品

## あのころ...

### 「おしん」の世界がそこに

カンボジアでのプログラムが始まってまもなく、タケオの職業訓練センターの少女たちにインタビューをした時のこと。休憩時間に皆でおやつを食べていても、ちっともそばに寄ってこない少女がいました。お母さん、お父さんを亡くし、叔母さんの家で暮らしていて、このセンターに引き取られてきたといいます。学校へも行けず、叔母さんの家の子どもたちの面倒を見るように言われ、また、時には叔母さんにぶたれたりすることもあったそうです。楽しかったことは？と聞くと、少し明るい顔で「3年生まで通っていた学校の遠足」と答えました。でも、そこより遠くへはどこへも行ったことがないそうです。

素晴らしい絆を織っている村の暗い現実。「おしん」の世界がそこにありました。（筒井 由紀子）

## 紛争や自然災害が多発する世界、そして日本で

2001年にニューヨークで起きた9.11同時多発テロ事件は大きな衝撃でした。その後のアメリカのアフガニスタン攻撃やイラク戦争を機に、紛争と世界経済・エネルギーの関係をテーマとした活動を行いました。田中優氏を招いて「私たちの暮らしから考える“非戦”」と題する学習会を開き、私たちのライフスタイルと石油の利権がもたらす紛争のつながりを学びました。平和行動に参加するとともに「えっ！シンプルなくらしが平和につながるの？」キャンペーンを行いました。

2004年スマトラ沖地震による津波や2005年パキスタン地震など、大規模な自然災害が多発するようになりました。2005年度には「緊急支援行動指針」を作成し、緊急支援活動を開始する条件や支援内容の基準を決めました。災害が起こった時は、復興に焦点を当て、被災地とつながりのあるNGOを通して必要とされている活動を支援しました。スリランカの漁民の仮設住宅づくりやパキスタンのトイレ施設づくりなどがあげられます。

そして2011年3月11日、東日本大震災。前代未聞の大規模な被害を受けた被災地は現在も復興には至っておらず、また様々な社会の構造をあらわにしました。

4月初めには緊急支援が開始されました。この時の会員の反応は早く、大勢の会員から続々と寄付金が集まりました。いち早く支援活動を開始した東北広域震災NGO支援センター（事務局：IVY国際ボランティアセンター山形）のネットワークに参加し、生鮮野菜・果物を持って現地を視察し、肌着などを送りました。同センターが実施した「キャッシュ・フォー・ワーク」の視察から、気仙沼の若者たちとつながり、協力して避難所などへの炊き出しを5回行いました。その後も継続してIVY気仙沼メンバー有志たちの新しいNPO立ち上げへの助言や応援をしています。

## 「分かち合うくらし」を軸に

東日本大震災と福島原発事故は、都市を最優先している経済・社会のしくみを明らかにし、その犠牲となっている多くの人々の存在をも浮き彫りにしたといえるでしょう。一方、世界中を席卷している新自由主義によるグローバルな経済の流れが、途上国は元より日本においてもますます格差を広げ、生きにくい社会を作り出しています。

20年前、「知ることから始めよう」とスタートした地球の木。海外支援プログラムをとおして、さまざまな生き方をしている人たちの苦難と喜びを知り、共通する課題について考えていくことが複雑な現代社会の問題の解決となると考え、歩んできました。これからも生活者の視点を常に大切にしながら、より人間を主体とした世界へと変えていく一翼を担っていきます。

世界の人々と、東北の人々と、次の世代の人々と「分かち合うくらし」を軸とし、様々なネットワークを強めながら活動を続けていきます。



学習会では、私たちの暮らしと世界のつながりを、紛争・エネルギー・お金など様々な観点から学びました

## あのころ...

### パキスタン地震バック・トゥ・ザ・フューチャー

パキスタン地震復興支援の調査に行ったのは2006年のこと。現地では主にポットトイレの設置が行われていました。設置希望者は、深さ3mほどの穴を掘り、その上に便器、上屋を組み立てます。しかし当初の穴は満杯になり、二つ三つ目と穴が必要になっているはず。続けて使用されているか気になるところです。

私は当時の会報に、現地のコミュニティの印象から、日本では失われつつある「絆」を感じたというようなことを書きました。その時には、日本が「絆コール」にあふれるようになるなど思いもありませんでした。線香花火のような気もしますが、「絆・連帯・協力」一困った人がいれば自分も何かしたい。世の中お互いに依存しあって生きているのだという考えが、未来を切り開く力になると思います。（米林 大作）



気仙沼の避難所で、若者たちと一緒に炊き出しを



年・月	主な活動
1991年	
7月	・グローバル市民基金地球の木設立総会 (フィリピンIIDのオダリー・ガルシアさんを招く)
10月	・フィリピン・ピナツボ火山噴火被災者支援
11月	・IMF・世銀合同総会批判! NGO会議 傍聴などのためタイ訪問
12月	・支援地現地調査に初めて参加(ラオス・JVCプロジェクト)
1992年	
2月	・フィリピン・マニラのスラムなど視察に参加
6~9月	・「タタロンと日本の子どもの絵」巡回展実施(1997年まで)
10月	・連続講座「第三世界の現状理解」開催 講師:村井吉敬、鷲見一夫、北沢洋子、松井やより
11月	・「第1次カンボジア市民調査団」に参加、35ヵ所で報告会
1993年	
3月	・オーストラリア熱帯雨林情報センターのアンニャ・ライトさん(環境活動家)との交流・学習会6地域で開催
6月	・カンボジア「NGO/パネルディスカッション」にパネリストとして参加
10月	・日比谷公園「国際協力フェスティバル」参加
11~12月	・連続講座「第三世界の現状理解」開催 講師:村井吉敬、田中優、武藤一羊
1994年	
2月	・逗子市自治体外交講座へ講師派遣
3月	・初の独自のスタディツアー実施 (マニラのスラム、ネグロス島のバナナ村など)
7月	・研修のために来日したネパールのニルマラK.C.さん(ジェンダー活動家)を囲み交流会
9月	・フィリピン・ミンダナオ島の民族歌劇団カリワットと交流会
11月	・連続講座「地球環境とリサイクル」など3地域で開催 講師:田中優
1995年	
3月	・第1回フィリピン青少年スタディツアー実施(2002年まで7回)
8月	・開発教育協議会全国研究会に参加
9月	・北京女性会議NGOフォーラムに参加
10月	・県主催50周年記念国際会議にパネリストとして参加
12月	・映画「教えられなかった戦争・フィリピン編」3地域で上映
11月	・「旅先の水を汚さない」をコンセプトに石けんトラベルセット開発販売
1996年	
2月	・学習会「ネグロス島で始まった民衆農業創造計画」開催 講師:ジョエル・アラパール
6月	・第1回「地球の木サロン-カンボジアの話」講師:リム・ナロン
7月	・「朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)食糧支援キャンペーン」に参加
10月	・WFP(世界食糧計画)日本事務所開設記念シンポジウムに参加
11月	・アンニャ・ライトさんのコンサート「森の歌・川の歌」開催
1997年	
1月	・設立5周年記念、劇団「風の子」による「ぼくたちの南十字星」上演
2月	・ネパール極西部の識字教室支援始める
2~3月	・連続講座「地球環境」4地域で開催 講師:田中優、柴田久史、ベン・セタリン
4月	・北京女性会議で出会ったタイのシニット・シテラックさん(ジェンダー活動家)の案内でタイの住民運動を視察
6月	・プロジェクトチームおよびマジカルバナナチーム発足
9月	・「北朝鮮子ども救援キャンペーン」(のちの「KOREA こどもキャンペーン」)に参加
11月	・カンボジア・シェムリアップで民芸品を扱うヘム・サルンさんと交流
1998年	
4月	・「横浜シティーネット国際シンポジウム」にパネリストとして参加
1999年	
4月	・「ファシリテータ養成連続講座」開催

世界の動き
1月・湾岸戦争始まる
4月・自衛隊ペルシャ湾へ機雷除去のため派遣
6月・フィリピン・ルソン島のピナツボ火山噴火 ・南アフリカ アパルトヘイト終結宣言
12月・ソヴェト連邦消滅
3月・国連カンボジア暫定統治機構(UNTAC)発足
6月・ブラジル国連環境会議「地球サミット」開催
9月・カンボジア国連平和維持活動(PKO)に自衛隊派遣
7月・カンボジア暫定政権発足
11月・日本コメ凶作、 タイ米など緊急輸入
4月・ルワンダ内戦で大虐殺、難民200万人発生
5月・南アフリカ共和国マンデラ大統領就任
7月・朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)金日成主席死去
1月・阪神大震災 ・世界貿易機関(WTO)設立協定発効
3月・オウム真理教による地下鉄サリン事件
7月・米・ベトナム国交正常化
9月・第4回国連世界女性会議、北京で開催
4月・普天間飛行場全面返還で日米合意
8月・新潟県巻町の住民投票で原発建設凍結
12月・ペルーの日本大使公邸で、人質・占拠事件
7月・北朝鮮食糧危機 ・アジア通貨危機発生 ・香港、中国へ返還
12月・地球温暖化防止京都会議 ・対人地雷全面禁止条約121カ国署名
2月・長野県で冬季オリンピック開催
3月・特定非営利活動促進法(NPO法)成立



連続講座で学ぶ



フィリピンスタディツアー



ネパール識字教室



北朝鮮食糧支援キャンペーン

年・月	主な活動
5月	・カンボジア「るしな・こみゆにけーしょん・やほねしあ」チャイルドケアセンター支援始まる
9月	・地球の木会員交流会「おいでよ、地球の木と仲間たち」開催
10月	・6地域の生活クラブ「デボーまつり」に参加
11月	・「第1期NGOかながわ国際協力会議」に委員として参加(以後5期)
1999年	
1月	・第1回ネパールスタディツアー実施(2010年まで8回)
3月	・開発教育教材「マジカルバナナ」出版
7月	・「途上国債務帳消しキャンペーン」日本実行委員会に参加
10月	・タイで自然・有機農業や伝統薬草の普及、販売を行うタイHOFのロサナー・トーシトラクーンさんと交流
11月	・シニット・シテラックさんの著書「母のキッチンガーデンから」を翻訳出版
11月	・NPO法人地球の木設立総会開催 シニットさんを招きシンポジウム「手をつなぐアジアの女たち」開催 (コーディネーター:谷山浩史、パネリスト:松井やより、牧島佐代子)
2000年	
3月	・「特定非営利活動法人」取得
7月	・「第1回あーすフェスタ」に参加
10~11月	・鶴見区の市場中学校で「国際理解講座」始める
10~11月	・ネパールSOARSのニルマラK.C.さん、S.K.シュレスタさんを招き「手をつなぐアジアの女たちPart2」開催 ニルマラさん「横浜国際協力まつり」にパネリストとして参加 「地域フォーラム」を3地域で実施
2001年	
2月	・連続講座「グローバル化基礎講座」開催 講師:村井吉敬、田中優
3月	・ネットワークを作りインド西部大地震被災者支援
6~7月	・「南北コリアと日本のともだち展」始まる
11月	・インド西部大地震被災地の現地調査参加
12月	・設立10周年記念シンポジウム「手をつなぐアジアの女たちPart3」開催 講師:レニー・トレンティエノ(「滞日外国人と連帯する会」)
12月	・鎌倉女学院高等学校「国際理解講座」に講師派遣始まる
2002年	
4月	・映画「神の子たち」を2地域で上映
6月	・「えっ! シンプルならしくが平和につながるの?」キャンペーン開始
6月	・「NGO非営利ネットワーク」[WORLD PEACE NOW][ピースウォーク in 神奈川]に参加
9月	・横浜南区の平楽中学校へ講師派遣始まる
9月	・事務所を新横浜のオルタナティブ生活館から関内へ移転
2003年	
2月	・連続講座「メディアリテラシー」2回開催 講師:小山紳一郎 ほか
6月	・生活クラブの「フォーラムアソシエ」に運営委員として参加
7月	・ネパールのカマル・フヤルさんによる「参加型ワークショップ」開催
9~10月	・連続講座「私たちの身近な森と農業」開催
11月	・フィリピン・ネグロス島のアンヘリト・エスタマさんを招き「エスペランサ農園闘争」報告会開催
11月	・「NEWマジカルバナナ(改訂版)」出版
2004年	
4月	・地球の木情報メールマガジン「Asian Wind」の発信開始
6~7月	・「NEWマジカルバナナ」ファシリテータ養成講座開催
7月	・フジロック・フェスティバル「NGOビレッジ」に参加
8月	・夏休み親子ワークショップ「ぶっ飛びアジア」開催
11月	・映画「アボン・小さな家」を2地域で上映
2005年	
3月	・スマトラ沖地震津波被災者支援
6・10月	・韓国NGO「地球村分ち合い運動」の女性たちと横浜、ソウルで「地球市民教育ワークショップ」開催
8月	・フィリピン・ネグロス島のラリー・ギリエマさんを招き、ワークショップ「ネグロスから学ぶ~若者に生きる力を」開催
8月	・「ほっとけない、世界の貧しさ」(ホワイトバンド)キャンペーンに参加

世界の動き
5月・インド、パキスタン核実験実施
5月・日米安保ガイドライン関連法成立
8月・国旗・国歌法成立
9月・JCO東海事業所で国内初の核臨界事故
10月・東ティモール独立承認
6月・初の南北朝鮮首脳会談
7月・三宅島噴火で全島民避難
1月・ネパール王宮で銃撃事件(国王夫妻など死亡)
1月・インド西部大地震
9月・米で同時多発テロ
10月・米・英軍アフガニスタン攻撃
4月・イスラエル軍、パレスチナ自治区へ大規模侵攻
8月・南アフリカで「持続可能な開発に関する」環境サミット
9月・小泉首相北朝鮮を訪問、金正日総書記と会談
3月・米・英軍イラク攻撃、フセイン政権崩壊
8月・北京で北朝鮮をめぐる6カ国会議開幕
1月・鳥インフルエンザで死者が相次ぐ
2月・イラクのPKOに自衛隊派遣
6月・イラク暫定政権発足
12月・スマトラ沖大地震、インド洋大津波発生
2月・地球温暖化のための京都議定書発効
8月・米南部に最大級ハリケーン「カトリーナ」上陸
10月・パキスタン北部で大地震



チャイルドケアセンター



手をつなぐアジアの女たち



来日したニルマラさん



関内の事務所開き



年・月	主な活動
2006年	
2月	・第1回ネパールYOUTH交流スタディツアー実施(2007年まで2回) ・パキスタン地震被災者支援
5月	・横浜国際ナショナルスクール「フードフェア」に参加
7月	・パキスタン地震被災者支援・復興状況現地調査
8月	・インドネシア・ジャワ島中部地震被災者支援
11月	・韓国NGO「地球村分ち合い運動」のメンバー5名を招いて「日韓地球市民教育交流 in YOKOHAMA」開催 ・設立15周年記念モニターツアー(フィリピン、ラオス)実施
2007年	
2月	・設立15周年記念シンポジウム「地球市民はSIMPLE LIFE ~暮らしから考える国際協力」開催 講師:大谷ゆみこ(「いるふあ」代表)
8月	・ラオス人形劇チエオボン「ぼくらの森には…」公演に協力
2008年	
1~2月	・連続講座「一歩ふみ出そう、私のシンプルライフ」開催 講師:田中優 ほか
2月	・ネパールSOARSユースクラブの2人を招いて「日本・ネパールYOUTH交流」を実施
8月	・ミャンマー洪水被災者支援(「かながわ復興支援ネットワーク」を通じて)
9・11月	・連続講座「暮らしを支えるエネルギー」開催 「六ヶ所村ラブソディ」上映&トーク 講師:牧野美登里 「あなたにも作れる!ソーラーパネル」講師:桜井薫
10月	・韓国NGO「地球村の人々」主催の「日韓地球市民教育交流 in SEOUL」に参加
2009年	
1月	・連続講座「暮らしを支えるエネルギー」(ブランチ企画)4地域で開催
7月	・横浜開国博Y150ヒルサイド「国際協力ひろば」に参加
8月	・「横浜下町パラダイスマつり・多文化映画祭」に参加
10月	・連続講座で制作したソーラーパネルをネパール支援地に設置
11月	・ワークショップ「『援助』する前に考えよう」開催 講師:田中治彦
2010年	
2月	・「ラオス森の交流ツアー」実施、絵本作家田島征三さん参加 ・講座「未来への投資~こうすれば得する生活術」開催 講師:田中優
3月	・ハイチ地震復興支援(「かながわ復興支援ネットワーク」を通じて)
7月	・「認定NPO法人」取得 ・「マジカルバナナV3(改訂版)」出版
12月	・生活クラブと連携してクメールシルク製品の注文生産始まる ・田島征三さんと「ラオス森の絵本」制作のための取材旅行実施
2011年	
4月	・「東日本大震災東北広域震災NGOセンター」に参加し被災者支援始める
10月	・IVY 気仙沼と協力して炊き出し実施(7月まで5回) ・設立20周年記念連続講座 第1回「ネパールの笛のコンサート&対談 “幸せを分かち合う地域づくり-ネパール・ラダック・日本”」開催 講師:サルバジット・ラマ(ネパールSAGUN) 鎌田陽司(「懐かしい未来」代表)
12月	・設立20周年記念連続講座 第2回「いきいきと生きるための経済~「連帯経済」で分かち合う幸せ」開催 講師:内田聖子(「アジア太平洋資料センター」事務局長)
2012年	
2月	・設立20周年記念連続講座&パーティ 第3回「飯館村から考える地産 地消のエネルギーと原発」開催 講師:浦上健司(飯館村後方支援チーム、日本大学生物資源学 部研究員) 大嶋朝香(「ひらつかエネルギーカフェ」代表)

世界の動き



事務所を訪れた韓国NGOのメンバー

7月・年金記録漏れ約5,000万件判明  
8月・米、サブプライム問題で世界信用不安

3月・中国のチベット・ラサなどで大暴動  
5月・ミャンマーに大型サイクロン直撃  
・中国四川省で大地震  
・ネパール王政廃止

8月・北京オリンピック開催  
9月・リーマンショックで世界金融不安  
12月・日比谷公園にて年越し派遣村



ネパールのユースクラブの二人を招く

3月・ラオス初の鉄道開通  
4月・オバマ大統領、ブラハで「核兵器のない世界」を呼びかける  
8月・衆院選で民主党圧勝、政権交代



1月・ハイチで大地震  
3月・タイで反政府派の大規模デモ、バンコク市内占拠  
6月・小惑星探査機「はやぶさ」60億kmの旅を終え帰還  
8月・チリ北部の鉱山で落盤事故、全員奇跡の救出

2月・エジプトのムバラク政権崩壊  
3月・東日本大震災、大津波発生、原発事故で緊急事態宣言  
・米英仏軍リビア空爆、カダフィ元最高指導者死亡  
10月・世界人口70億人突破  
12月・北朝鮮、金正日総書記死去



気仙沼で炊き出しをする

5月・北海道電力泊原発が定期検査のため発電を停止。国内50基の原発はすべて稼働停止に

地球の木支援プログラムの変遷

国名	ラオス	フィリピン	カンボジア	ネパール
1991	生活改善普及活動(JVC)	タタロン・スラム社会環境改善(IID)		
92		ミクロネシア・PRRM(M)		
93		ネグロス島・PRRM(M)		
94	森林保全(JVC)	保健・衛生・環境プログラム		
95	【村人自らの力で森林を守る】	ネグロス島民衆農業創造計画	農村開発(JVC)	
96		タタロン・グローバル教育(IID)	植林・米銀行・豚銀行・家庭菜園・井戸掘り・ジェンダートレーニング・貯蓄	
97				極西部識字教室(なんびろ/ SOARS)
98	農林複合(JVC)			チャイルドケア・センター(ほくぶるしな)
99	【共有林づくり・ジェンダートレーニング・自然農業】			極西部村人の自立(SOARS)
2000		ネグロス島ツプラン研修農場(JCNC)		【女性中心の識字教育 小学校教師給与・裁縫教室・貯蓄トレーニング】
01	森林保全 自然農業 ジェンダー研修(JVC)	【砂糖農園労働者の有機農業研修】	チャイルドケア・センター(るしな)	
02			子どもの自立支援	教育支援(SOARS)
03				【コミュニティセンター・人材育成センターの建設・NGOトレーニング・青少年グループ育成・農業トレーニング】
04		ネグロス島 レッツ・ゴー・ファミリー(JCNC)		
05		【モデル農家の農業 基盤づくり】		
06	森林保全 自然農業(JVC)		職業訓練センター(VCAO)	チャイルドケア・センター(るしな)
07	【家庭菜園・井戸掘り 稲の幼苗1本植え・米銀行 森林ボランティア育成】			
08				
09	森林保全 自然農業(JVC)			幸せ分かち合いムーブメント(SAGUN)
10				【図書室建設・奨学金 高校教師給与・生活改善】
11	【家庭菜園・稲の幼苗1本 植え・米銀行・養魚・家畜】		クメールシルク(VCAO)	

IID: Initiatives for International Dialogue PRRM: フィリピン農村再建運動  
JVC: 日本国際ボランティアセンター  
JCNC: 日本ネグロスキャンペーン委員会(現APLA/あぶら)  
SOARS: Society for Action And Research for Sustainable Development  
SAGUN: サグン 参加型開発を進めるNGO  
VCAO: Vulnerable Children Assistance Organization  
るしな: るしな・こみゆにけーしょん・やほねしあ  
( )内はパートナーNGO名称



## 地球の木設立20周年実行委員会

最初の設立にかかわり、2～3年、運営委員をしました。その頃は会員を増やすのに一生懸命で、加入用紙を必ず持っていて、知っている人に会うと加入をよびかけていました。その後地域でネット活動や市民活動などを経験しましたが、いつも地球の木が根底にあったと思います。

今、久しぶりに運営にたずさわっていますが、ここまで成長した地球の木の10年後、20年後が楽しみです。

(松本 陽子)

今年は20周年の節目の年になり、私は記念行事に参加した事で一度立ち止まり考える事ができました。

地球の木が誕生した20年前より豊かな世界になったのでしょうか？便利になり品物はあふれてますが、国内でも格差が広がり、住みよきはありません。今こそアジアの人たちと手をつなぎ「幸せ分かち合い」の輪を広げていきたいです。

(豊田 由紀子)

3人の子どもたちが小学生の時、お小遣いから出してくれた50円ずつも入れて会員になりました。20年過ぎたのですね。2月4日のパーティ会場の設営では、まだ咲き始めの優しいスマレの花籠を用意しましたが、お料理とともにそれぞれのテーブルを彩ってくれました。春爛漫のころ「20周年の時のすみれがこんなに見事に咲いていますよ」と鉢のひとつを持ち帰った方が写真を送ってくれました。

(國分 純子)



ネパールのサルバジットさんが研修で来日するというので「これはチャンス！」と20周年に「ネパール笛のコンサートとトーク」を企画することにした。

ところが、準備も整った頃、突然ビザが下りないという連絡！観光ビザで就労する外国人が多いから？？祈るような気持ちで数日を過ごした後、ビザが下りたという知らせに胸をなで下ろした。

(乳井 京子)

サルバジットさんの笛のコンサートは不思議な音色と太鼓の響きで安らぎました。「にぎわい座」の広い会場の設置は、多くの方が手伝ってくれました。サルバジットさんがネパールからお祈りに運んでくれた地球の木の口入りのタペストリーも飾ることができよかったです。

残念なのは、今となっては、あの笛も太鼓の音も思い出せないことです。

(木谷 博子)

主に3回目の講座に関わってきました。地球の木では何年も前からエネルギーに関する問題を取り上げています。

今回、省エネ、エネルギーの自給を訴えることができ、平塚のエネルギー関連団体の会員としても良かったと思っています。

(坂下 まさみ)

地球市民教育、フィリピン、ラオ、ホームページリニューアル……どの分野も私にとっては白紙からのスタート、歩きながら考えるしかありません。時には考えすぎて進めなくなることもありました。地球の木に関わって得られた最大のことは「世界が大きく広がった」ことと「仲間と共にやることの達成感、楽しさ」です。次の世代へバトンタッチして、そろそろ引退です。

(中野 真理子)

### 編集後記

地球の木の20年は大河ドラマのよう、なんとか誌面に表現したい。編集作業はそこからスタートしました。20年をリードしてきた横川さんと丸谷さんを編集会議に引っ張り出して記憶を探っていただけ、お忙しいなか無理をお願いして原稿を書いていただきましたが、「無慈悲」にもバッサリと切った部分もずいぶんあります。おおぜいの力でたくさんの成果を積み上げることができた地球の木の20年を、会員全員で共有できたら、編集委員としては本望です。(真矢)

■地球の木設立20周年実行委員会記念誌編集部会

真矢 公子、沼田 由美子、米林 大作 原稿執筆協力：横川 芳江、丸谷 士都子